

寄稿文

日独交流とベートーヴェン「第九」の誕生
「三帝国」を結ぶ長い旅路の物語

五月女 光 弘

NGO担当大使、元駐ザンビア大使

はじめに

時を超え歌い継がれる歓喜の歌声「フロイデー」、日本で最も親しまれ歌われ、そしてテレビ・コマーシャルでも流される交響曲。それはベートーヴェンの交響曲第九番「合唱」でしょう。今年（2019年）は日本で初めて第九が歌われ、それから九十九年、来年（2018年）に百周年を迎えます。いったいこの曲がどのように生ま

れ、どのような道程を経て日本にやってきたのか、その長い旅路を辿ってみましょう。

この物語は、以前私が徳島県鳴門市の「旧板東俘虜収容所」を訪問した際に、地元の高老からお聞きした話も交え記述したものです。

「神聖ローマ帝国」から始まる「第九」の旅路
ベートーヴェンは一七七〇年十二月十六日に神聖ローマ帝国（後にドイツ帝国）のボンで誕生、若いころから天才ぶりを発揮、ピアノ曲の作曲で名声を博し、交響曲作曲構想を持ちつつ二十代半ばにオーストリア帝国のウィーンに移り住み、一八一五年から交響曲第九の作曲に取り組みました。そして一八二四年初頭に、彼の敬愛し愛読したフリードリッヒ・シラーの頌詩「歓喜に寄す、An die Freude」を抜粋し、第四楽章の合唱部分に書き入れて全てが完成したのでした。

「オーストリア帝国」ウィーンでの初演は？

一八二四年五月七日にウィーンのケルトナートーア劇場で第九の初演奏が行われ大成功を収めました。その時の演奏は次のような編成でした。

四十歳頃に全聾となったベートーヴェンが総監督としてメトロノームを使いテンポを指示、指揮は第一指揮者のミヒャエル・ウムラウフ。他に第二指揮者（コンサートマスター

兼務）、合唱指揮者、管弦楽団総数約百名。少年合唱団（ソプラノ・アルトのパート担当）男声合唱団（テノール・バスのパート担当）総数約八十名。ソリストはソプラノとアルトは女性、テノールとバスは男性が歌いました。その後ベートーヴェンは第十交響曲の作曲に取り掛かりましたが未完成のまま、三年後の一八二七年三月二十六日に五十七歳でこの世を去ったのでした。

日英同盟と青島要塞攻略戦

一九一四年、欧州で始まった第一次世界大戦の際、日本帝国は日英同盟に基づきドイツ帝国に宣戦を布告、ドイツの租界地である中国の青島（チンタオ）守備隊を攻撃することとなりました。日本軍主力は久留米第十八師団二万九千、司令官は神尾光臣陸軍中将（後に大将、作家有島武雄の岳父）、参謀長は山梨半造陸軍少将（ドイツ留学経験あるドイツ通）で、攻撃を前にドイツ軍守備隊（指揮官ワルテック海軍大佐）に対し通告します。

青島要塞内の外国人、民間人、婦女子、病人などを要塞外の安全な場所へ移すこと、要塞内の攻撃されたくない場所、病院、水源、食糧庫などの屋根に目印の白旗を掲げることを。そして一ヶ月の後の十月三十一日、日本陸海軍は青島要塞に総攻撃を開始、そして一週間後、孤立無援で戦うドイツ軍に対し降伏を勧告します。それに応じてドイツ軍四千七

百は十一月七日に降伏しました。神尾司令官は、ドイツ軍兵士に呼びかけます。諸君は祖国から遠く離れた孤立無援の中で祖国の為に勇敢に戦ったことに敬意を表します。しばらく日本で休んで下さい。日本国民は必ずや諸君の勇気と愛国心を称え客人として迎えることとしましょう。そして捕虜たちは日本各地の俘虜收容所に收容されましたが、その内の約千百名が徳島県の板東俘虜收容所（現在の鳴門市）に送られたのです。

「関ヶ原」、「川中島」と「青島攻略戦」の戦死比率

一六〇〇年の「天下分け目の大合戦」と云われた関ヶ原の戦いは、東軍徳川方約九万、西軍石田方約八万、総計約十七万の大軍で戦われた事になっていましたが、戦死者総数は八千で、戦死比率はたったの五%。ほとんどの大名は戦わず、寝返り、裏切り、逃亡などで、まじめに戦った大名が損をした合戦でした。ちなみに一五六一年、本気で戦った上杉謙信・武田信玄の第四次川中島合戦では、両軍総数三万、戦死八千で戦死比率は二六%だったと云われています。

他方、青島要塞攻防戦では日独両軍合わせた戦死者は四百五十、戦死比率は一%。少々でした。これは多分世界戦史上の最少の数字で、相手に対する思いやりと寛容の戦いであった証しなのでしょう。徳島をはじめとする六ヶ

所の收容所に送られた兵士達は温かく迎え入れられたとのこと。

「日本帝国」最初の「第九」の演奏は？

板東收容所長の松江豊寿大佐（後に少将）は寛容篤実の士でした。明治維新の際、政府軍と戦って敗北した徳川幕府側の旧会津藩士の子息で敗者の苦しみを知る者として、ドイツ軍捕虜に温情を持って接し、彼らを文化人、科学者、芸術家として高く評価したのでした。

そして一九一八年六月一日、捕虜たちは遙か祖国に思いを馳せつつ、日本初のベートーヴェンの交響曲第九を演奏しましたが、その編成は次のようでした。

指揮者はハンゼン軍楽隊長、オーケストラとしてドイツ沿岸砲兵軍楽隊四十五名、合唱団はドイツ軍青島（チンタオ）守備隊兵士八十名。ソリストも四パート全員男性兵士でした。楽器は青島からの持ち込みと日本人有志からの提供でした。その際の聴衆は捕虜達と松江大佐以下日本軍警備兵達及び地元の有志だけでしたが立派な演奏が行われたとのこと。

そして終戦により二年八カ月の收容所生活を終えてドイツに帰国を前に、彼らに温かく接してくれた地元板東集落の民五百人全員を招き感謝を込めて盛大な第九の演奏会を行い、大きな感動を与えたのでした。

「第九」を廻る恩義の輪廻

日本側の寛大さに恩義を感じた捕虜たちの中から、例えば軍医は近代ドイツ医学を大学で講義、工兵隊は鉄橋・道路建設技術を指導し、日本の技術向上に貢献しました。更に菓子作りの名手カール・ユールハイムや、ソーセイヤ等もそれぞれ日本の職人に技術を伝授、日本社会に貢献をしたのです。

寛容な処遇で捕虜達から信頼され慕われた松江豊寿大佐は、その後浜田第二十一連隊の連隊長に転任、少将として退官、故郷へ戻り会津若松市長として市民の為に尽されました。

終わりに

日本人による初の全四楽章演奏は、一九二四年十一月二十九日、東京音楽学校（現東京藝術大学）による演奏でした。そして十二月に第九がよく演奏される国は、ドイツ、オーストリア、そして日本の三カ国だそうです。なぜ十二月なのでしょう？ 諸説ありますが、一年の締め括りとして十二月はみんなが愛するベートーヴェンの誕生月を祝って歌うのです、と云う事にしておきましょう。平和を願う「Freude! Freund!」の歌声が更に世界の国々に広がりますように。（終わり）

私が所属する第九を歌う「東京プロイデ合唱団」は今年第二十回目の演奏会を迎えます。団員二百五十名、毎年東京芸術劇場で満席のお客をお迎えし、日本ワイルドハーモニ交響楽団、トブレベルの指揮者ソリストと共に演奏します。元々この合唱団は東京都公益法人「東京高齢協会合唱団」として、高齢者に元氣と生き甲斐を与え地域に貢献する活動をするために創設された団体で、これまでの最高齢は九十四歳、七十代は鼻たれ小僧です。来年二月には全国で第九を歌う合唱団が、鳴門市の「板東俘虜収容所」跡の記念会堂に集結し、「ベートーヴェン第九」日本演奏百周年を祝う記念の演奏会が開催されることになっています。

板東俘虜収容所演奏会プログラムと演奏風景

初演プログラム (日本語訳)

徳島オーケストラ
第2回シンフォニー・コンサート
80名の強力な合唱団 友好出演

指揮
沿岸砲兵隊音楽隊長
M・A・K主任委員 ハンゼン

独唱者
志願兵 フェーゲナー
後備兵 シュテッパン
志願兵 フリッシュ
後備隊長 コッホ

ベートーベン 第九交響曲

第一章 アレグロ・マ・ノン・トロポ・ウン・ボ・コ・マ・エ・スト・ゾ
(遠く、ただ、煙た目に、そしてやや威厳をもって)

第二章 ソルト・グ・ヴァー・チュエ (きわめて速く活発に)

第三章 アダージオ・モルト・エ・カンタービレ
(きわめてゆっくりと、そして歌うかのごとく)

第四章 プレスト (コーラスとソリストと共に)

6月1日 土曜日(公開稽古 5月31日 金曜日)
1918年 夕方 6時30分
どうか煙草は御遠慮下さい

板東俘虜収容所印刷所にて印刷



鳴門市ドイツ館に展示の俘虜収容所第九初演の様子

旧き良き日本人の物語 (その2)

2006年4月13日

日本経済新聞

抄

二ユーヨー リトアニアといえば、ク総領事館に勤務していた二十数年前。現地のユタヤ人協会代表でラビ(ユダヤ教指導者)のシユナイヤー師が、ある問題で日本政府への抗議に来た。ひとしきり話を終えた師は突然「本当は来たくなかった。日本には恩義があるのです」と切り出した。

驚く私に、師は淡々と自身の過去を語り始めた。実は第二次大戦の際、ナチスドイツの迫害を逃れてポーランドからリトアニアに赴き、鉄道で大陸を横断。ロシア・ウラジオストクから海路、福井県の敦賀や神戸を経て日米開戦直前に渡米したのだった。

五月女 光弘
リトアニアといえ、領事館閉鎖まで多くのユダヤ人に日本通過ビザを発給した杉原千畝氏ゆかりの地。師もその時の一人だった。敦賀では地元住民から炊き出しの温かいもてなしも受けたという。師は「我々はこの恩を忘れない。五十年後の子孫も必ず覚えていよう」と話された。実際、阪神大震災の際には協会から日本に多額の義援金を送っていたのだ。

日本は戦後、多くの国々から支援を受け、復興を成し遂げた。果たして今、その恩義に報い、国としての品格を保っているのか。師の面影を思い出すたび、自問している。(とある)とみつひろ「外務省参事 与・NGO担当大使」

＜苦難の日本を救った、国、機関、人々＞

日本ほど国際社会からお世話になった国はない。関東大地震、第2次大戦後、阪神淡路大震災、東日本大震災などの際など、苦境に苦しむ日本人は国際社会に助けていただいた。

- * 関東大震災で日本を救援する米国 (NYT紙)
- * イングリッド・バーグマン CARE 親善大使
- * オードリー・ヘプバーン UNICEF 親善大使
- * 日本経済新聞・交遊抄 (2006.4.13.五月女寄稿)



CAREの親善大使イングリッド・バーグマン 1948年

交遊抄

ニューヨークのリトニアといえは、総領事館に領事館職員まで多くのユダヤ人が日本通過ビザを二十数年前に発給した杉原千畝氏ゆかりのユダヤ人の地。師もその一人、人協会代表でラビ(ユダヤ教指導者)のシユナイ、住民から秋喜出しの温かや一師が、ある問題で日ともなしを受けたとい本政府への抗議に来た。一師は「我々は、五十年ひとしきり話を終えた師は突然一本当は来たくなかった。日本には恩義があるのです」と切り出した。

驚く私に、師は淡々と自身の過去を語り始めた。実は第二次大戦の際、ナチスドイツの迫害を受け、保護を成し遂げ、逃れてポーランドからリトニアに赴き、鉄道で大陸を横断。ロシア、フランス、ストックホルムを経て日米開戦直前に渡米したのだ。

恩義の重さ

五月女光弘

協会の日本に多額の義援金を送っていた。日本は戦後、多くの困窮から受け、保護を成し遂げ、逃れてポーランドからリトニアに赴き、鉄道で大陸を横断。ロシア、フランス、ストックホルムを経て日米開戦直前に渡米したのだ。

格を保てているのか。師の面影を思い出さず、格を保てているのか。師の面影を思い出さず、格を保てているのか。師の面影を思い出さず、格を保てているのか。



CAREの親善大使オードリー・ヘプバーン 1948年

戦後の日本を救ったララ物資への感謝の碑

[横浜埠頭に設置の香淳皇后御歌碑]

「ララの品 つまれたる見て とつ国のあつき心に 涙こぼしつ」「あたたかきとつ国人の心つくし ゆめなわすれそ時はへぬとも」(注) とつ国とは外国の意。

ララ (LARA) とは、戦後の困窮した日本人を救った北米・南米からの救援物資。

